

復興 ing



震災後の市民による主体的な
ふるさとづくりを加速させるために

特定非営利活動法人
石巻復興支援ネットワーク(やっぺす)



スペインタイルで町を彩り、人を呼ぶ
特定非営利活動法人 みなとまちセラミカ工房



古民家の再生で地域の活性化
特定非営利活動法人 中之作プロジェクト

震災後の市民による主体的な ふるさとづくりを加速させるために

特定非営利活動法人石巻復興支援ネットワーク（やっぺす）



代表理事
兼子 佳恵さん
かねこ よしえ

“やっぺす”こと石巻復興支援ネットワークの母体は、代表理事の兼子さんが2000年に仲間とともに立ち上げた子育て支援の市民団体です。震災後、県外からの石巻地域へ支援したいという声を地域へ届ける中間支援の役割が求められ、外部からのボランティアを地域につなぐサポート役をしていましたが、2011年5月、外部に頼るだけでなく地元の人たちが中心になってこれからの復興支援を進めていきたいという思いから新たに団体を立ち上げ、活動を開始しました。現在は、「女性の活躍推進」「仮設住宅・復興公営住宅におけるコミュニティ形成支援」「復興の担い手育成」「復興コーディネート事業」を4本柱に活動しています。

震災後、求められた役割と機能

団体別名の「やっぺす」という言葉は、石巻では「一緒にやりましょう」という意味があり、被災者として同じ目線で寄り添って活動をしようという思いが込められています。

震災後、いち早く始めたのは仮設住宅にこもりがちな方々への仲間づくりのサポートです。その後は、2012年3月には、外で働くことが難しいママがおうち仕事として自宅で製作できるハンドメイドアクセサリーブランドを企業の協力で立ち上げ、4月には内閣府地域社会雇用創造事業として、被災地の課題解決に挑む人材を育成・サポートするため、関西のNPO法人と協働し、女性や若者を対象にした社会起業家を支援する「やっぺす！起業支援ファンド」とインターシップ「やっぺす！人材育成スクール」を実施しました。

一方、この頃から次第に地域外の企業による支援活動のコーディネートの依頼がたくさん舞い込むようになりました。手作りのホームページで活動の紹介を始

めたことや、現地での様々な活動にメディアが取材に来るなど、広く外部に伝わる機会が増えた時期です。また、石巻市内の子どもたちがボランティアの人たちに配るミサンガを作るプロジェクトのサポートもしており、そうした活動が世の中に広まるタイミングとも重なったようです。まさに来る球を打ち続ける状態が続いたと兼子さんは言います。

寄付をきっかけに企業との協働に

そんな中、2013年に日本ロレアル株式会社の有する化粧品ブランドランコムからの寄付を受けることになり、「石巻の復興に向けて女性の社会参画を推進し、まちづくりに女性の声を反映させていくことで、より魅力的な地域づくりにつなげることを目的に、女性の自立・起業支援プログラム「Eyes for Future by ランコム」をランコムと石巻市との協働により開講することになりました。

2013年度は25名が卒業、第2期は起業サポートコースを新たに開設し、33名が卒業。第3期はより起業



▲ランコムスクールの様子



▲株式会社 IBM による PM コンサルの様子

に特化した形でプログラムを組み地域のオピニオンリーダーを育成することを目指し、22名が卒業しました。そして、第4期からは新規参加者24名に加え、卒業生向けのフォローアップを行い、新たなビジネスを立ち上げる卒業生も生まれました。

そうした事例を踏まえ、第5期である2017年はよりビジネス色を強く、グロービス経営大学院などの協力も得ながら創業や地域のリーダー育成に向けた構成とし、参加した26名は様々なディスカッションを重ねながら地域課題を解決していくためのスキルを磨き、様々な展開を見せています。

こうした継続の背景には、日本ロリアル株式会社からの寄付に加え、プログラムに必要な専門性の連携や2期目から受講料を有償化するなど、継続を視野にいたした事業にしていくとともに参加者自身が主体的に学ぶ意識を持てるような工夫があるのです。

2018年3月にはよいよ第6期がスタートします。

「まちづくりは、ひとづくり」

「復興の担い手育成」として取り組んでいるのが「石巻に恋しちゃったプロジェクト（石恋）」です。石巻・女川・東松島で趣味や特技を持つ市民講師を発掘し「達人」として講師になっていただき、ものづくり講座やフィールドワークなどの体験プログラムを行うまちづくりプロジェクトです。2013年に経済産業省「東日本大震災ソーシャルビジネスノウハウ移転・支援事業」の一環として、岡山県総社市で実施している「みちくさ小道」のノウハウ移転を受け開始したものです。

初年度は年に3回数日間の期間を定め、様々なテーマの講座やイベントに地域内外の人々が自由に参加できるプログラムを実施しました。そうした「達人」を紹介するガイドブックを発行することで互いの顔が見える関係性が生まれ、独自のイベントの開催や地域のサークルが出来あがるなど、新たなつながりと輪が生まれました。そして翌年以降、民間の助成金や公的な補助金で資金を補いながら場づくりを続け、これまでプログラムを開催した「達人」は230名にもなりました。回を重ねるごとに仲間の輪が広がり、そうした輪

が主体となり次の仕掛けが生み出されていく、その循環を下支えする役割を果たしながら次の展開を模索し続けています。

プロボノによるマネジメント力強化

2016年より、日本IBM株式会社より組織基盤強化のサポートを受けています。数多くのプロジェクトを抱える中で、マネジメント力の必要性を感じていたところ、首都圏のNPOの紹介で、仙台で開催された勉強会に参加したことがきっかけでした。

団体立ち上げ以降、地域内外からの声に応じる形で事業を作り続けてきましたが、「今後の事業展開や継続に向けた最適化をし、地域に必要な取り組みは残せるものに変えていくといったマネジメントスキルが求められる」と兼子さんは感じていたと言います。日本IBM株式会社の若手有志4名のプロボノからプロジェクトマネジメント手法のレクチャーを伴走形式で受け、2年目である2017年は必要に応じて相談ができる関係性を持つことができました。

「震災によりたくさんものを失ってしまったけれども、支援されっぱなしは誰もが嫌。自分たちでできることは削がないでほしい。そうでないと対等な気持ちになれないから。」と兼子さんは言います。ちょっとしたチャンスやきっかけがあれば誰もが活躍できる主人公になることができる、そのチャンスが生まれる場づくりが必要で、そうした人と人との交流が次のエネルギーを生み出し、市民による主体的な復興を加速させる、そう信じて「やっぺす（一緒にやろう）」は活動を続けていきます。

特定非営利活動法人 石巻復興支援ネットワーク（やっぺす）

<問合せ先>

〒986-0811 宮城県石巻市元倉1丁目18-20

TEL▶0225-23-8588 FAX▶022-774-1469

E-mail▶info@yappesu.jp

URL▶http://yappesu.jp

スペインタイルで町を彩り、人を呼ぶ

特定非営利活動法人 みなとまちセラミカ工房



理事長

阿部 鳴美さん

あべ なるみ

震災前に陶芸サークルを主宰していた理事長の阿部さんは、「女川になくなってしまった景色やいろんな思いをスペインタイルに描いて街中を明るく彩りたい」という思いから、震災後にスペインタイルの工房をオープン。地域の仲間6人とともにNPO法人「みなとまちセラミカ工房」をスタートさせました。

この間、阿部さんは何度も東京に行ってスペインタイルの技法を学び、スペインバレンシアにも視察に行きました。そこで見た色鮮やかに彩られた街並みに希望を感じ、懐かしい風景や未来予想図を描いたスペインタイルで女川のまちを明るく彩りたい！と思ったと言います。2015年に完成した新しい商店街はたくさん色鮮やかなスペインタイルで彩られ、町に住む人々や訪れる人々の心を明るく彩り始めています。

なぜスペインタイルなのか

津波で公民館分館にあった焼成窯や電動ろくろもすべて流されてしまい、阿部さんは陶芸サークルを解散しようと考えていましたが、被災地支援に入っていた京都造形芸術大学から窯を寄贈されることになり、また陶芸ができる！という希望の光が灯りました。折しも、町の復興連絡協議会の中で異文化交流の話が持ち上がり、その中でスペインの伝統文化であるスペインタイルに関心を寄せた女性がいて、紹介を受けたことがスペインタイルとの出会いです。その女性に誘われるがままにスペインタイルアート工房東京教室へ通い、技法を学び、2012年3月にはスペインバレンシアへ研修旅行に行きました。色鮮やかに彩られた街並みに希望を感じ、懐かしい女川の風景や思いをスペインタイルに描いてまちを明るく彩りたいという思いが生まれました。スペインタイルは、1,000度近い高温で9時間かけて焼き上げることで何年経っても絵柄が色褪せることはありません。

描いた思いを事業にしていくため、内閣府の復興支援型地域社会雇用創造事業の「新たな一歩プロジェクト」に申請したところ、幸い『みなとまち女川スペインタイル事業』は採択され、2012年6月には「きぼうのかね商店街」の仮設店舗に工房を構え、仲間6人とともに2013年4月にNPO法人として工房を立ち上げました。思いの実現のためには、タイル製作の高い技術が必要であると考え、その創業補助金250万円の大半は東京での研修に費やし、自らの技術を磨きました。

趣味ではなく「売れる商品」に

工房では、作品の製作と販売、体験教室を実施しています。初め頃は、技術を学びに通っていた東京のスペインタイルアート工房でのつながりからいくつかのデザインを譲り受けて製作をしていましたが、売上を増やすためには独自の新しいデザインが必要でした。そこで、様々な事業支援を行う仙台市の創業スクエアに相談を持ちかけたことが大きな転機になったと



▲スペインタイル絵付け体験の様子



▲復興公営住宅「おらほの壁画プロジェクト」絵付けの様子

阿部さんは言います。

地域性を生かした新デザインのコンセプト設計から具体的なイメージ案まで、工房のスタッフ全員で女川を象徴するモチーフを挙げ、4人のイラストレーターの協力を得て20種類ものデザインが生み出されました。工房スタッフ6名は全員、震災前の女川の風景を知っています。見慣れた、当たり前風景「観光栈橋」「赤白灯台」「雄勝につながる桜のトンネル」「海上獅子舞」などたくさんの思い出が浮かびました。そうした懐かしい思い出をタイルに表現し、一過性の復興グッズではない、これからの女川の町を彩るデザインが完成しました。さらに、デザインの専門家がいなくとも一つひとつのパーツを自由に組み合わせてアレンジできるような工夫も取り入れ、その後の事業展開に大きく活かされています。

企業とのコラボレーションで大きく前進

2014年、JR女川駅舎の完成とまちびらきを1年後に控えた女川町には、外部からの支援の声がたくさん届いていました。その中の一つ、サッポロホールディングス(株)から町役場の紹介を通じて寄付の話が舞い込みました。株主からの寄付に同社が同額を上乗せして寄付をするというものです。そのためには申請書を、とすぐさま工房のスタッフ全員でストーリーを描き、街並みを彩る店舗や事業所の看板をオリジナルのタイルで彩りたい、まちをタイルで輝かせる!という思いで「きぼうの星プロジェクト」の企画書を作りました。デザインの一部にサッポロビールのトレードマークである星をあしらひ、街中にきぼうの星を輝かせようというプロジェクトです。

また、通販会社フェリシモとのコラボレーション企画「女川まちづくりスペインタイルプロジェクト」も実施しました。当初、商品づくりの依頼でしたが、通信販売ができるほどの数を揃えられる体制がなかったことから、オリジナルのタイルデザインをもとにしたアクセサリーやスカーフ、バックなどをコラボして作

り、寄付付き商品として販売するという企画になりました。そこで集まった基金で同じデザインのタイルを製作し、街に設置をしていくというもので、女川町役場の協力も得ながらプロジェクトは進みました。

さらに、フェリシモが震災直後に開設をした基金をもとにした「とうほくIPPOプロジェクト」にも採択され、街に設置されたタイルを紹介した「女川タイル散歩マップ」を製作しました。「お気に入りのタイルを探しながらまち歩きを楽しんでほしい」と呼びかけ、町に訪れる人々との交流にもつながりました。この基金の支援は、2016年度も受けています。

製作に欠かせない設備投資はそれぞれのタイミングで外部資金を活用し、継続と着実なステップアップにつなげてきました。当初から戦略的に事業化を進めたわけではなく、様々なつながりや声かけ、気持ちの通ったあたたかい支援を前向きに捉え、ただひたすら「女川の街を明るく彩る」ことを目指してきた結果と言えます。2015年12月、女川駅前プロムナードの商業施設「シーパルピア女川」に出店をしました。そして今年の4月には、震災後に阿部さん自身が技術を学びに行っていた東京の「スペインタイルアート工房」の宮城女川教室が開講します。東京と大阪に続いての開講です。普段から技術指導など、様々なサポートを受けてきましたが、教室の開講により新たな仲間が増えることも期待できます。

「女川と関わる人の数だけ、まちが彩り豊かになっていく」そんな期待に、夢は広がります。

特定非営利活動法人 みなとまちセラミカ工房

<問合せ先>

〒986-2261 宮城県牡鹿郡女川町

女川駅前シーパルピア女川E棟21

TEL/FAX ▶ 0225-98-7866

E-mail ▶ ms_cobo@ybb.ne.jp

URL ▶ <http://www.ceramika-onagawa.com>

古民家の再生で地域の活性化

特定非営利活動法人 中之作プロジェクト



副代表理事

豊田 善幸さん

とよだ よしゆき

事務局スタッフ

豊田 千晴さん

とよだ ちはる

福島といえば福島原発事故による避難者への支援が目にとまりますが、実は東日本大震災で津波の被害もありました。江戸時代には四国から塩を輸入し、会津へと運ぶ「塩の道」の出発点となった福島県沿岸南部のいわき市中之作地域。そこには豪商が多く、価値ある多数の古民家が建っていました。しかし、この大震災で津波被害を受け、多くが解体される事態になり、何とか古民家のすばらしさを後世に伝えたいと奔走したのが、NPO 法人中之作プロジェクトの豊田さんです。

築 200 年の古民家を譲り受け、その修復は、専門家だけではなく、専門家を講師とし、土壁づくりや塗装ワークショップなどを実施することで地域内外の人たちを巻き込んで修復しました。以降、建物や町並みの保存を通して地域コミュニティの活動拠点づくりに取り組んでいます。

多くの人の手による古民家再生

いわき市で設計事務所を経営する傍ら古民家に関心を寄せていた現副代表理事の豊田善幸さんは、小名浜から 5 キロほど北にある中之作も被災し、古い建物が多い歴史ある港町の古き良き古民家が次々と壊され、町並みが失われていくのを目の当たりにしました。どうにかそれを食い止めたいと、解体される予定だったいわき市中之作漁港に近い場所にある築 200 年の古民家の所有者に保存の意向を伝えると、「このまま保存して地域のためになるなら」と理解を得て、豊田さんは古民家を譲り受けることにしました。

江戸時代に建てられたと伝えられるこの古民家は、被災地を支援する団体からの助成金や復興支援の補助金を活用し、土壁を塗ったり、床を塗装したり、襖を張り替えたりと、多くの人々の参加による修復セミナーを開催し、「清航館（せいこうかん）」として生まれ変わりました。2 年半の修復作業に参加した人々は、千人を超えました。

レンタル古民家として賑わいを復活

再生した古民家は、地域コミュニティをつなぐ拠点であり、イベントスペースとして活用されるなど、レンタル古民家「清航館」としてスタートしています。昔は商業港として栄えたという中之作ですが、この「清航館」は、江戸時代に塩問屋をしていた商家の建物でした。確かに中に入ると造りは素晴らしく、1 階の正面には立派な神棚や隠し階段、2 階には細工が施された漆塗りの床柱、貝細工の柱など豪商ぶりがうかがえます。

建物を保存できた後は、その活用と維持に悩むことが多いのが現実。この建物も部屋をレンタルすることで維持費を補い、その活用促進に向けて工夫をしています。

まず、この近くでちりめん細工のお裁縫教室を開いていた「ままや」に奥のスペースを週 3～4 日貸すことにしました。定期的に生徒さんが通ってくるほか、一般の市民向けに講座を開催するときもあるので、人の出入りがあります。その「ままや」は以前から、毎年 2 月初めに 3 日間「つるし雛飾りまつり」を開き、季節の催事として地域で親しまれていました。清航館に移って



▲清航館でコンサート



▲みんなで清航館の修復作業



2階 床の間と床柱▶



▲1階 立派な神棚

きて 2015 年から「ままや」と中之作プロジェクトとが共催を始めたことで、さらなる相乗効果がありました。

「ままや」で学んでいる生徒さんが一針一針丹精込めて作った色とりどりのつるし雛を清航館の館内や軒下に飾るほか、中の 1 日は中之作プロジェクト主催のお茶会も開催することからさらに人気を呼んでいます。

また、近隣のお宅にも呼び掛けしたところ、年ごとにそれぞれのつるし雛を軒下に飾るところが増え、期間中は延べ 4000 人を超える人が訪れるようになりました。いわき市の観光サイトでの広報や、バスツアーの立ち寄り先に組み込まれるなど、市と協働の展開もしています。

コミュニティの拠点として

清航館は、有料のレンタルスペースとして、基本的に個人や市民グループに貸し出しています。10:00～17:00 の日中は、一般料金が 8,000 円、会員は 5,000 円で 1 階の広間と見晴らしの良い 2 階の部屋が使えます。しかし、清航館を知ってもらうまでは利用が少ないと想定し、開所から 2 年間は、「使ってみるか事業部」と銘打って、120 名を超える会員の中の有志が企画を持ち寄り、写真、餅つき、保存食、陶芸、日本酒、時にはマグロの解体など、様々な特技を持った会員の協力でイベントを開催しました。

徐々に子供服のマーケットや音楽ライブ、ハンドメイドの小物販売など、グループで使ってもらえるようになって、1 年を過ぎたあたりからは、維持費とトントンの収入となりました。それでもレンタル古民家として活用されているのは、会員の協力とそのネットワークが大きな支え手であることは変わりません。

そこで、2 年ほど前から共通の趣味を持った会員の登録制による「部活動」をはじめました。現在のところ、自転車部、写真部、和の食を楽しむ女子部、釣り部、陶芸部、日本酒部、餅つき部、の 7 部です。特に餅つき部は、毎年恒例になっている「日本一長い餅つき大会」の活動です。機械に頼らず餅米の手植え、稲刈りも手作業、昔ながらの脱穀機で丁寧に脱穀、そして年末に清航館の釜戸で蒸して餅をつく、という長い時間をかけてする活動です。

地域住民との信頼関係が第一

同じいわき市でもこの地域と縁があったわけではなかった豊田さんは、当初、この家を保存のために購入する話をどのように進めたらよいか考えました。所有者はもちろんですが、より信頼してもらえるようにこの地域の区長さんにも協力してもらえるよう話に行ったといいます。そのことが功を奏し、80 歳を超える所有者の女性は、「まちのためになるなら、そしてほかの人も中に入れるのなら」と安価な金額で譲り受けました。

以降、この地域のまちづくり協議会のメンバーになり、近隣にも日頃声がけをしてきた結果、最近は「いろいろやっているね～行きたいと思ってるけども時間が無くて。がんばってね」と声をかけられるようになりました。最初は代表理事だった豊田さんですが、清航館に棟続きで自分の設計事務所兼自宅を構えたことから、誤解を招かない様にと昨年、地元の区長を代表に立て、副代表に変更したと事務局スタッフであり妻の千晴さんが話してくれました。

中之作プロジェクトでは、古い港町の風景を次の世代に伝えるために、この町にふさわしい風景を形づくる建物を増やしたいと考え、港から細い路地を登ったところの古い空き家を借り、修復を始めています。今回もプロから学ぶ DIY 教室の「サッシ取り付け教室」「外壁張り教室」「断熱材施行教室」「ペンキ塗り教室」など、参加型修復工事を始めます。

港が見渡せる眺めいい場所であることから「月見亭」と呼び、今年の秋にはカフェもあるもう一つのコミュニティスペースとなる予定です。

特定非営利活動法人 中之作プロジェクト

<問合せ先>

〒970-0313 福島県いわき市中之作字川岸 10

TEL▶0246-55-8177 FAX▶0246-55-8178

E-mail▶nakanosakuproject@gmail.com

URL▶http://nakanosaku.xsrv.jp

クラフト（工芸）としての復興戦略



東北大学大学院
経済学研究科
准教授

高浦 康有 さん

東日本大震災の被災地において、その復興に携わる今回の3人の社会起業家たちの共通点は何だろうか。それは古民家の土壁修復、スペインタイル工房の立ち上げ、女性たちによるハンドメイド・アクセサリーの製作支援など、奇しくも手作りクラフトに関係しているという点である。3人は、NPOの中立的な性格を上手に活用しながら、公的な復興支援金や民間企業の助成金など外部資金を得てきた。そのみならず設計士やデザイナー、企業のプロボノラの有する専門性を上手に組み入れながら、市民協働の要素も取り入れ、地元スタッフによる新商品開発や市民講師によるものづくり講座、会員有志によるイベント企画などを実施するに至っている。専門性と市民性という相異なる要素を巧みに組み合わせ、ひとつの流れを生み出すことで持続可能な事業に仕上げているのである。

また3人は「当初から戦略的に事業化を

進めたわけではなく、様々なつながりや声かけ、気持ちの通ったあたたかい支援」を取り込みながら、その都度事業を最適化するマインドをもっている。80年代、経営学の異端児として知られたヘンリー・ミンツバーグ教授は、それまでの計画一辺倒な戦略観に対抗し、クラフト（工芸）としての戦略、という概念を示した。ちょうど陶芸家が土をこねて知をめぐらしつつ指で感じながら作品をつくるのと同様に、戦略もその都度の状況に合わせて自己形成されていくというのである。

もちろん陶芸家としての技量やノウハウがあってはじめて戦略的なパターンが浮かび上がってくる。社会起業家もまた日々の実践をふまえて獲得した知識や経験をもとに戦略をクラフティング（創発）していく。その底流にあるのは、地元コミュニティへの愛情である。その愛への共感が広がる時、今回のケースのように上質なクラフトが生み出されるのであろう。

平成29年度宮城県NPO等の絆力を活かした震災復興支援事業

3/15
木

『復興』の先を考えるミーティング in 仙台

～絆力を活かした震災復興支援事業報告会 & 交流会～

日時：3月15日（木）13：30～17：00
会場：せんだいメディアテーク1階オープンスクエア



東日本大震災からまもなく7年。すでに震災復興は、一過性のものではなく、長期的視点を要する課題へと変わっています。

今なお、被災地で課題の解決に取り組んでいるNPO等の活動を知っていただき、『復興』とその先の在り方をNPOや企業、コミュニティなど、地域の担い手同士がともに考える交流会を開催します。

将来の世代のための環境や資源を壊さずに、今の生活をより良い状態にする「持続可能な開発目標」(SDGs) (※)を学びながら考えましょう。

当日は「みやぎソーシャルビジネス支援ネットワーク」による相談対応も行います。ご希望のある方は参加申込時にその旨をお伝えください。

【相談内容：各種助成金、組織づくり、NPO法人設立手続き、許認可の取得、資金調達など】

※相談内容によっては、都合により当日対応いたしかねる場合がございます。その際は、後日対応いたします。

I部 報告会 平成29年度NPO等の絆力を活かした
震災復興支援事業成果報告
10:00～14:40

II部 交流会 情報提供 「SDGs視点で考える復興支援」
14:50～17:00 黒田かをりさん
(一般社団法人SDGs
市民社会ネットワーク代表理事)

事例 「誰も取り残さない社会へ
～NPOと企業の協働～」

小椋 亘さん
(NPO法人ふうどばんく東北 AGAIN 事務局)



▲黒田かをりさん

交流会 「復興の先をSDGsで考えよう」
企業やNPO等の紹介をした後、グループで話し合います。
(名刺、パンフレットなどをご持参ください。)

参加対象 どなたでもご参加いただけます。 **参加費** 無 料

お申込み、お問合わせはお電話で
認定NPO法人杜の伝言板ゆるる TEL 022-791-9323
主催：宮城県 企画運営：認定NPO法人杜の伝言板ゆるる

『復興ing』バックナンバーは
県ホームページで公開しています。

<https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/kyosha/fukkoing29.html>

復興ing NPO等の震災復興取り組み事例集

2018.2 vol.3

発行：宮城県環境生活部共同参画社会推進課
〒980-8570
仙台市青葉区本町三丁目8番1号
TEL：022-211-2576

企画・編集：認定特定非営利活動法人 杜の伝言板ゆるる
〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡3-11-6 コーポラス島田B6
TEL：022-791-9323 FAX：022-791-9327
E-mail：npo@yururu.com URL：https://www.yururu.com/